

「3オクターブの恋」

藤木
健

登場人物

星野 彩香 (16) 上尾高校1年

小田 海斗 (16) 彩香の幼馴染

神宮寺 和真 (18) 合唱部・部長

佐々木 結衣 (18) 合唱部・部員

合唱部員達 (16)

ピアノ伴奏者 (18)

あらすじ(138文字)

低音ボイスが悩みの女子高生・彩香は、憧れの先輩に声を掛けられると胸が高鳴り、3オクターブも声が高くなる。そして先輩がいる合唱部にスカウトされ、独唱コンクールに出場する事に。だが先輩には彼女がいたのを知る。独唱コンクールで高音が出なくなった彩香を救ったのは幼馴染・海斗であった。

枚数 19

文字数 4828

特記事項

恋心が声として花開く瞬間を描いた、甘酸っぱい青春ドラマ。

声のトーンが感情とリンクする構成がユニークで、「3オクターブ上がる恋」というタイトルの意味がラストで鮮やかに回収される。笑いと胸キーン、成長の余韻が見どころ。

○上尾学院高校・全景

「上尾学院高校入学式」と書いてある
立て看板。

○同・校内

星野彩香（16）が校門をくぐり、校
内を歩いている。

背後から小田海斗（16）が近寄る。

海斗「おはよう、彩香」

彩香「あれ？ 海斗も同じ高校だっけ？」

海斗「俺もこっそり、この高校受験してたん
だよ」

彩香「全然知らなかった……って事は海斗と
また3年間、同じ学校か。偏差値足りてな
かったのに、良く合格出来たわね」

彩香は一般の女子より低めの声である。

海斗「こんな俺でも受験勉強、頑張ったのさ」

彩香「まさか、私と同じ高校に行く為？」

海斗「……んな訳ないでしょ？ たまたま家
から一番近い高校を受験しただけ（と笑

う」

彩香「ふーん」

二人の目の前に部活の勧誘のビラ配り
をしている生徒達がいる。

海斗「ところで部活は決めた？」

彩香「ううん、まだ。海斗は？」

海斗「俺は勿論、帰宅部（と笑う）」

彩香「やっぱりね。中学時代と一緒にじゃん」

イケメンで高身長 of 神宮寺和真（18）
が彩香に合唱部の勧誘ビラを差し出す。

神宮寺「合唱部、宜しくお願いします！」

彩香「（受け取り）合唱部？」

彩香、立ち止まり、ビラを配った生徒
の顔をマジマジと見る。

彩香「（神宮寺を見て目が輝く）！！」

神宮寺「もし良かったら、今日の放課後に体
験入部やっていますので来て下さいね！」

彩香、神宮寺を見て胸がキューンと高
鳴り、声のトーンが上がる。

彩香「（高音で）はい。是非伺いたいと思い

ます！」

彩香と海斗、神宮寺の前から立ち去る。

海斗「お前、分かりやすいな」

彩香「（地声に戻り）えっ？ 何が？」

海斗「先輩に話しかけられた時、声のトーン
が上がった」

彩香「えっ？ 何それ？」

海斗「女子は気になる人を目の前にすると、

緊張して声が1オクターブ上がる」

彩香「（少し照れながら）気になる人って

！？ ちょっと素敵だなって思っただけ

よ！」

海斗「でも、彩香の場合、1オクターブどころか、3オクターブくらい上がったけど
な（と笑う）」

彩香「えっ、そんなに上がったた？」

海斗「ああ。高音過ぎて、ヘリウムガスみたい
いになってたわ（と笑う）」

彩香「（膨れた顔で）ひどーい！ 海斗は相
変わらず、デリカシーないな」

海斗「で、どうするの？」

彩香「どうするって？」

海斗「さつき、見学に伺いたいと思いますって言ってなかった？」

彩香「あれは社交辞令って言うか、その場のノリかな」

海斗「せっかくだから体験入部してくればいいじゃん。どうせ暇なんだし」

彩香「失礼な！ それに幼馴染の海斗なら私がかラオケ苦手なの知ってるでしょ？ 高音出せないから、いつも原曲キーを二つ下げてるし」

海斗「でも、先輩の前なら高音出るんじゃないかね？」

彩香「それと、これとは別！ でもせっかくだから見学だけでも、してこような？」

(と微笑む)

彩香、振り返り、ビラを配ってる神宮寺を見つめている。

タイトル「3オクターブの恋」

○音楽室（放課後）

合唱部の体験入部に30人程の女子生徒達が来ている。

その中に彩香の姿。

皆の见ている視線の先に神宮寺がいる。

彩香M「（周りの女子を見て）これってもしかして、全員、神宮寺さん目当てなの？」

神宮寺が体験入部一同の前に立つ。

神宮寺「皆さん、初めまして。部長の神宮寺です。宜しくお願ひします！ それでは发声練習も兼ねて皆さんの音域の確認をしようと思います」

一同「はい」

合唱部員の佐々木結衣（18）がピアノの前に座り、

結衣「では皆さん、私について来てください」

結衣がピアノの1音叩く。

結衣「あ、あ、あ、あ、あ。はい」

一同「あ、あ、あ、あ、あ」

結衣がピアノの音階を上げて1音叩く。

結衣「あ、あ、あ、あ、あ。はい」

一同「あ、あ、あ、あ、あ」

彩香、既に高音が出ず苦しそう。

結衣、1オクターブ上げて1音叩く。

結衣「あ、あ、あ、あ、あ。はい」

彩香、ふと神宮寺の顔を見つめる。

神宮寺、彩香と目が合い微笑む。

一同「あ、あ、あ、あ、あ」

彩香、突然高音が出る様になる。

結衣、更に1オクターブ上げ1音叩く。

結衣「あ、あ、あ、あ、あ。はい」

彩香「あ、あ、あ、あ、あ」

気付くと彩香以外の体験入部者は高音が出なくなり全員ギブアップしている。

結衣、立ち上がり、彩香に近寄る。

結衣「あなた、お名前は？」

彩香「（地声に戻り）ほ、星野彩香です」

結衣「星野さん、普段の声は低音なのに、何

処からその高音が出て来るの？」

彩香「えっ、それは？（神宮寺の顔を見る）」

神宮寺「合唱部のメンバーでも、中々出せない音域だし、星野さんには天性の才能があるのかもしれないね」

彩香「天性の才能……？」

結衣「うちの合唱部、ソプラノパートが少ないの。良かったら入部しませんか？」

彩香「でも……私……」

神宮寺「僕の方からも、是非、入部宜しくお願ひします！」

彩香「せ、先輩がそう仰るのなら……」

神宮寺「じゃあ決まりだね！ 合唱部へようこそ！」

彩香「（照れながら）はい」

一同、拍手をする。

○廊下（放課後）

教室から出て来た海斗の目の前を彩香が歩いている。

海斗、背後から近寄り、

海斗「よお彩香！ 久しぶりに一緒に帰ろう
ぜ！」

彩香「ごめん。これから部活なの」

海斗「えっ、見学だけじゃなかったのかよ？」

彩香「うん。正式に合唱部に入部したの。な
んか私に天性の才能があるんだって！」

海斗「天性の才能？ お前に？」

彩香「うん。私、生まれて初めてそんな事言
われた」

海斗「そうか。頑張れよ！」

彩香「うん。有難う」

彩香、そう言い残して、走り去ってい
く。

寂しく彩香の後ろ姿を見つめる海斗。

○音楽室

合唱部員達が結衣のピアノ伴奏で歌っ
ている。

その中に彩香の姿も。

神宮寺「では、今日の練習はここまで。お疲れさまでした」

合唱部・一同「お疲れ様でした」

彩香も帰ろうとしたその時、結衣が声を掛ける。

結衣「星野さん、ちよっと時間ある？」

彩香「（戸惑いながら）はい」

結衣「あなたのソロパート、ホント素晴らしいわ！」

神宮寺「星野さん、良かったら声楽コンクールに出てみませんか？」

彩香「せ、声楽コンクールって何ですか？」

神宮寺「独唱のコンクールの事です」

彩香「独唱って一人で歌うんですよね？ 絶対無理です！」

結衣「あなたは本校始まって以来の才能の持ち主だと思います。合唱でその声が埋もれてしまうのは勿体ないわ」

彩香「で、でも……」

神宮寺「星野さん、引き受けてくれますか？」

神宮寺、彩香の目を見つめながら、彩香の手を両手で握る。

彩香「（高音になり）は、はい」

それを見て神宮寺と結衣、微笑む。

○廊下（放課後）

海斗が音楽室の前の廊下を通りかかると、彩香が微笑みながら歌っている横顔が見える。

海斗「！（彩香を見て笑う）」

彩香に声を掛けようと、廊下を進んで行くと、その隣に神宮寺がいるのに気付く。

海斗「（彩香と神宮寺を見て）……」

海斗、声を掛けず立ち去る。

○通学路（日替り）

学校の帰り道。

海斗が一人歩いていると背後から彩香が駆け寄る。

彩香「海斗！」

海斗「ん？」

彩香「これ」

彩香、『第20回・上尾市・声楽コンクール』のチケットを海斗に手渡す。

海斗「声楽コンクール？」

彩香「うん。音痴だった、あの私が大勢を前にして一人で歌うんだよ。凄くない？」

海斗「（チケットを見て）……ふーん、そうなんだ」

彩香「なんかリアクション薄くない？ もつと驚いてよ！」

海斗「それで？」

彩香「そのコンクールが今日の18時からなの。私、初めての舞台上で緊張しちゃうと思うし、一人でも知ってる人の顔が見えた方が自分の力を発揮出来るかなあって思ってた」

海斗「でも、歌う時は先輩の顔を見て歌うんだろ？」

彩香「えっ……」

海斗「それに帰宅部は趣味に没頭するから忙しいんだよ。行けたら行く。じゃあな」

彩香「あっ」

海斗、彩香の前から立ち去ってしまう。

その後ろ姿を寂しそうに見つめている

彩香。

○海斗の部屋

ベッドに寝そべりながら、コンサートチケットを見つめる、海斗。

× × ×

(フラッシュユ)

音楽室で微笑み合う、彩香と神宮寺。

× × ×

海斗「あんな笑顔、俺の前で見せた事、一度も無かったよな」

海斗、ふと部屋に飾ってある写真立てに目をやる。

幼少期の頃の海斗と彩香が微笑み合っ

ている写真である。

海斗「昔は俺の前でも笑ってたんだな……」

海斗、写真の中の笑顔の彩香をジッと

見つめている。

海斗「その笑顔に惚れたんだっけ」

海斗、立ち上がる。

○上尾市文化ホール・全景

「第20回・上尾市・声楽コンクール」

と書かれた立て看板。

○同・控室

控室で彩香と神宮寺が話をしている。

神宮寺「緊張してる？」

彩香「（強張った顔で）はい。とっっても……」

神宮寺「星野さん。ここは教室だと思って、

いつも通りリラックスして歌ってください

ね」

彩香「あの、先輩にお願いがあります」

神宮寺「何ですか？」

彩香「一番前の席に座って頂けませんか？

先輩の顔が見えると安心して歌えると思うんです」

神宮寺「はい。分かりました（と微笑む）」

○同・大ホール

舞台の上に緊張した面立ちで彩香が立っている。

一番前の席に座っている神宮寺と目が合い微笑む、彩香。

彩香「神宮寺先輩！」

司会者「エントリーナンバー10番、上尾高校1年、星野彩香さん。曲は『サウンド・オブ・ミュージック』です。どうぞ」

彩香、ピアノ伴奏者に視線を送り合図をする。

そこへ遅れて入って来た結衣が神宮寺の隣へ座る。

彩香、正面を向くと神宮寺が結衣の手を握っているのが見える。

彩香 M 「えっ？ あの二人付き合ってたの？」

ピアノの伴奏が鳴り始めるが彩香、高音が出なくなり歌い出せないでいる。

ピアノの伴奏者が止まる。

ピアノ伴奏者「（小声で）星野さん、深呼吸して」

彩香、頷き、軽く深呼吸する。

彩香 M 「駄目……今、深呼吸したら過呼吸で倒れそう」

ホール内はガヤガヤとなり異様な雰囲気。気。

下を向いて今にも泣き出しそうになる

彩香。

神宮寺「どうした？ 星野さん」

心配そうに見つめる、神宮寺と結衣。

彩香 M 「誰か助けて！ 私、歌えない！」

すると、大ホールの扉が勢いよく開いて海斗が入って来る。

海斗「（大声で）彩香！ 頑張れ！」

彩香「海斗！？」

海斗「笑顔！」

海斗、両手の人差し指を口角近くに当てて笑顔のポーズと取る。

彩香「（海斗を見て）！！」

彩香、胸がキューンと高鳴り、海斗を見て頷くと笑顔になる。

海斗「そうだ。その笑顔だ！」

彩香、ピアノ伴奏者に目で合図をして伴奏が流れる。

彩香、高音が出る様になり、歌い始める。

サビの部分にさしかかり海斗、手拍子をする。

場内の観客も海斗に合わせて手拍子で彩香を後押しする。

彩香、見事に歌い切る。

場内、盛大な拍手に包まれてる中、いつまでも微笑み合う、彩香と海斗。

○通学路（夕方・日替わり）

海斗が一人で帰り道を歩いている。

すると、背後から彩香の声が聞こえてくる。

彩香「海斗！」

海斗「（振り返り）ん？ 彩香」

彩香「昨日は有難う」

海斗「（少し照れながら）まあ幼馴染として

最低限な事をしたまでさ」

彩香「たまには一緒に帰ろうか？」

海斗「おう」

二人、並んで歩いてる。

海斗「そう言えば、部活はどうしたんだよ？」

彩香「辞めた」

海斗「えっ！？ 辞めたの？」

彩香「ちよっと背伸びし過ぎてた。やっぱり

私には自然体で話せる人の方がいいみたい」

海斗「って事は先輩にフラれたのかよ？」

彩香「（首を振り）先輩、同い年の彼女がい

たの……私もあと2年早く生まれてたら、

先輩とお付き合い出来たのかな？」

海斗「（低い声で）俺はお前と同じ学年で生

まれて良かったと思ってるけどな」

彩香「君、分かりやすいね」

海斗「何がだよ？」

彩香「男は格好つけると、低い声になる」

海斗「うるせー、たまたまだよ！」

彩香「ねえ、久しぶりにカラオケでも行かな

い？」

海斗「いいね！ 低音と高音でデュエット出

来るしな」

彩香「私は海斗の前じゃ、高音でないけどね

（と笑う）」

海斗「でも声楽コンクールの時、俺が応援し

たら高音出たじゃんか！」

彩香「あれは、たまたま」

海斗「たまたまかい！」

彩香「でもちよつとだけ、見直したけどね」

海斗「素直じゃないな」

彩香「君もね！」

二人微笑み合い、歩いて行く。

(
丁
)